

日本語方言状態の東北と西南

「日本語方言の分派とその系脈」

藤原 與

國語として統一された日本語を見るのに、これは、その史的

事情の悠久複雑さ、國土の地位特質によつて、そうさうに多彩な方言分化をおこしている。これを日本語方言状態と

言うならば、日本語の方言状態は、そうさうに複雑な方言分派關係になつてゐる。これは、觀察の精密粗大の各段階に應

じて、こまかな分派關係にも、大きな分派關係にも見られる。いわゆる方言區劃は、そこに、さうさうにかみこめられる。しかしこれは、すでに分派關係を言つたように、ついに

は、分派の關係として、國語としての一大關係構造に見あつめられるものである。日本語の方言状態は、ついに、日本語

方言共時態すなわち日本語方言として、一つの構造体に見上げられる。このさい區劃は、順次高位の次元に擴大して把握

すべき動態として理會される。日本語は、國語として、この

ような動態を包攝する構造体である。國語は、このような方言的構造をもつて立つ。

この國語の方言的構造について、筆者の一つの觀察段階から、その分派を眺め、その系統脈絡をたぎらうとするのが、「日本語方言の分派とその系脈」の意圖である。

二

日本語が、國語としておこなわれるうちに、このように地方的分化をさけた原因は、さうさうに考えられようか。基本的な説明となるのは、柳田國男先生によつて早く多く實証されるさうさうのあつた周圍論であるさうさう。中央語成立の後、中央からの言語改新波の影響は、土地の事情その他に、左右されながら、言語を、地方地域的な集團状態にまきめていた。日本語方言分化の大勢は、このように見えておおかた支障なく理解される。

このように、言語周圍の事實を考える時、今、國土の東北と西南の兩極地方に、相應する同似的なものが分派しているのも、當然のこまこましてうけさられる。

すでに柳田先生は、「蝸牛考」初刊本（昭和五年）におい

○ドーガイ マダ オサイヂャッタースモ。

さうかまたいらつしやつてください。

は南薩枕崎町方面の例であるが、このような「オサイヂャッタモス」あるいは「オサイヂャッタモンセ」の言いかたは、南九州にいちじるしい。高い敬意の、手あつてい表現法である。この「オサイヂャッタモス（タモンセ）」は、「オサイヂャッタタモス（タモンセ）」であろう。ここに、「オサイヂャツて」について「オサイヂャル」がよりあけられる。これは、原田芳起氏も「方言」四ノ三（昭和九年三月）の「鹿児島方言の敬語法に就きて」で説かれたように、「お差し出ある」であるうか。大隅の高山町なごでは、

○オサイヤン ド カイ。 いらつしやる？

さうような「オサイヤン」を聞いた。これは、「オサイヂャル」にさういう関係にあるか。「オサイヤンドカイ。」は、訪問してのあいさつことばで、女子用で、敬意は中等度のことばであつた。

○ダイモ オサイヤンヂャッタロ ガ。

だれもいらつしやらなかつたでしよう？

のように、「オサイヤン」を特定のあいさつことばにかぎらないでも言つている。たゞこれも、上等の尊敬法ははされてない。

「オサイヂャル」にさきによく慣用されているのは「オヂャル」である。

○コツチ オヂャッタモンセ。 こちらへいらつしやい。

「オヂャル」には「お出ある」がくまれる。いつたいには「オヂャル」「オサイヂャル」の二種の慣用語法をもつて、「お……ある」形式のなごりは當地方に固定的なものとなつているとも言うことができようか。

○オサイヂャツクダサイ。

いらつしやつてください。「來客への應答」

などというのでは、「オサイヂャツて」に、現代的な「ください」が結合している。こういう形式をもざるまでに、「オサイヂャル」は慣用化し固定しているとも見られる。肥前平戸島でも、

○オアガリヤツサイ。 お上がりなさいませ。

さうのが、あいさつことばとして、慣用化している。

○オイデアツサリ。 おいでなさい。

なごとも言う。後者の例では、「お……ある」形式がくみやすい。前者例でも「オ……ヤツ」とある。「ヤツサイ」「アツサリ」の構成はしばらく問われないにしても、今ここに、「お……ある」語法の内在するのはみこめられる。それがこのような特殊構造の特殊残存になつたために、當地では、「平戸の人はアツサイクツサイバツカリ言うて」に言うようにもなつてゐる。

九州の「お……ある」ことばの状態は、まず薩隅中心の南九州にいちじるしくて、他は平戸その他に点々と見いだされ

る程度であろう。その、南九州に色濃い状態からしりぞいて、中國地方を見るのに、所によつては、偶然的に、「オヂヤル」ならばをこめていゝ。「お……ある」形式が残存するにすれば、さかしく「オヂヤル」こそが、最後に、孤立的に残つてゐるのは注意してよい。發生以來これの占めた用語としての特別の地位、その轉訛による別語としての獨立なきの事情がそうさせたのであろう。瀬戸内海中の島では、「オヂヤル」の命令形について、「來チャール」の言いかたをも派生させてゐるのが見いだされる。中國内部の俚語の文句には、「オ行キヤル」なきもこめていゝ。が、いずれにしても、總じて痕跡的なものにすぎないのは、九州南部その他の狀況との對應上、興味深く眺められる。四國にはこりたてて言うべきものがなく、近畿地方がまたそうである。

もつとも、近畿こそばで、

○オーサカアタラー イテヤツテ ノー。

大阪あたりへいらしてね。

のように、「行てヤツて」と言う一種の敬語法は、「行てでアツて」で、やはり「ある」こそばを内部的に持ったものと見られる。これは中國地方でも「行てチャツた」を言い、安藝中心には「行ッチャツた」を轉訛させてゐるが、みな近畿のご同様、敬語氣分を流露するものである。この種の内在「ある」語法は、「お……ある」表現法に何ほしかの關連を持つものご解すべきであらうか。

近畿のに關連しては、奥村三雄氏に「敬語表現の一形式」(近畿方言10)へ一九五一—四月ががある。

筆者はこの種のものごかりに「て」敬語法ご呼んでゐる。

中國の安藝石見周防地方で、「お早うごさいます。」「おあり

がさうごさいます。」「の心意をもつて、「お早うアリマス。」「

「アリガトアリマシテノー。」なきご言つてゐるのも、その

「アリマス」の「ある」が、近古流の「お……ある」形式の

「ある」こそばに關連するものなので、こうなり得てゐるの

かとも思ふ。關西内部の、「居る」ご「有る」ごの使用區別

なきの現象も、

○村長さんは、うちにアルヤロご思ふがな。

なきのこそばづかいも、ここにあわせて考えられようか。そ

れにしても、近畿に「お……ある」形式の明らかなものはな

い。

中部地方がまたそうであらう。關東地方に屬する伊豆七島

になるご、たごえば新島に、

○シンセーサマガ オヂヤツタ ヨー。

先生さまがいらしたよ。

なきごある。八丈島についても、先年、安田秀文氏の調査例

に、

○ホントーデ オジャリイタス ノーワ。

さうようなのがあるのを拜見するごごできた。國立國語

研究所の「八丈島の言語調査」(一九五〇年)の、「八丈島

の言語の敬語資料」の項によれば、

八丈島のひびきも、「八丈島にはいいいなこまばた
くさんある」ということを自慢にしている。…中略…そし
て例にあけられるのが、きまつて、od[pare]「うらひや」
という語である。

とあり、「行け」の所に、つぎのような八段階がかかけてあ
る。

Od[arimo:so] > Od[ka:te] tamore > Od[arjare] > Od[pare] >
se / wase > wate tabe > ike

當地に「オヂヤル」こまばを頻用するさまは、ここに十分想
像することが出来る。「お……ある」形式そのものの生きた
すがたはさうなのか。「お……ある」形式が最後の残存の
すがたをさめたるなら、それは、どこにも相應じて「お
出ある」の言いかたをとらめてゐるのは注目をひく。八丈島
のは、南九州のさくらへておもしろい。前掲例に、Od[ra:te]
tamore がある。これは、南九州の「オヂヤッタモス(タモ
ンセ)」によく似ている。八丈島の「オヂヤツてタモーレ」
からして、九州の「オヂヤツタモス(タモンセ)」が「オヂヤ
ツてタモス(タモンセ)」であることがよく理解される。
「タモーレ」に對して「タモス」「タモンセ」とあるのは、
別に問題としなくてはならない。「タモリ申せ」なごも考え
られよう。」八丈島の例に、また、Od[arjare] というのがあ
る。「オヂヤリ」とある上に、さらに「ヤレ」とある。いわ

ば「お出ありあれ」の構成になつてゐる。これは無用の重複
と言えよう。しかし、すでに「オヂヤル」が一語の敬語動詞
となつた後は、その補助詞——助動詞として、「ある」こま
ばの「ヤレ」が、自由につき得るはずである。ここには、「お
……ある」形式から完全に析出された「ヤル」敬語助動詞の
存立と使用がみこめられる。右の報告書の「Jare」の條を見
る。

各村においてもつちも一般的に用いられる。 -mo:so, -te
tamore, -te tabe より敬意はうすが目上に對しても用
いられる。

とある。この用語感情・使用気分は、昔、近古末の中央語に
「ヤル」がおこなわれた時のさ似たようなものであろう。九
州南部地方に今日いちじるしい獨立の「ヤル」こまばも、そ
の敬語法としての品位は、この八丈島のさ似たようなものさ
言えよう。いずれにもせよ、ここに、「ヤレ」のいちじるし
い用法がみこめられる。一般的な見かたをすれば、「お……
ある」形式のおこなわれる所には、「ヤル」こまばはおこる
はずだつたと言へる。

關東一般には、「お……ある」表現法に屬する見るべきも
のではない。東北地方にはいると、まず福島縣内にこれが見ら
れる。相馬の大館町をさぐれば、「來た」こまばを「オヂヤッ
タ」と言う。ここには、比較的明らかに、「お……ある」を
見てとることが出来る。中村町の例では、

○ナニシテ オデアール。何していらつしやる？

なごご言う。「オデアール」ごあつて、「オヂャール」「オヂャル」ごはなつてゐない。「お……ある」形式の「お出る」に出たものが、さきの西部地方では「オヂャ……」ごなつており、八伊豆も「オヂャ……」ご、一方、東北方面では、「オデア……」の形をとつてゐる。なぜ東北ではこの形にとゞまつたのか。西南地方ごこのような差ができてゐるごごに ついては、廣い視野での理田考察が必要ごなろう。東北では、裏日本がわには、「お……ある」形式にかかわる事象はあまり見いだせなくて、表日本がわに、廣くこれが見いだされる。そこには、ひごしく、「オヂャル」の「……ヂャ……」にならぬ形、「……ヂャ……」以前の形ないしその推移形が見いだされるのである。

表奥羽では、相馬から北は、磐城・陸前を措いて、陸中・陸奥に、「お……ある」尊敬表現法のおこなわれることがいぢるしい。相馬の西の會津には、「オザル」「オザリヤス」がある。磐城陸前地方には、「れる・られる」敬語の命令形による。

○來ライン。○行かイン。

なごの、輕い尊敬の勸奨表現法が、かなりよく分布してゐる。この地帯をさし措いたかのように、その北に、「お……ある」形式關係のものが、展開し分布してゐる。「れる・られる」敬語ご「お……ある」敬語ごは、元來、似たようなもの

のであつたらしい。土井忠生先生の「吉利支丹の敬語觀」によれば、ロドリダスは、

「られ・るる」。「れ・るる」。「あり・ある」。「おん」又は「お」ご共に。「あり・る」。動詞の語根ご共に。

の三者について、「口語及び文語に使用ご敬意の度合は低い。」ご述べてゐる。(吉利支丹語學の研究二七〇頁)

さて陸中になるご、

○センセオデヤツタ。先生がいもつしやつた。ご言ひ、

○マダ オデツテ クネ。また來ておくれ。

ご言う。「お……ある」はごごに「オ出ヤツ」ごなつており、縮約單純化されて「オ出ツテ」ごもなつてゐる。

註 印刷不如意のため、地方音を音聲記号で表示することができなかつた。おおよそを推知していただければ幸である。

○コツチャ オンデリ。こつちへいらつしやい。

なごの「オンデリ」は、「お出あれ」ミいう命令形の言ひかたが轉訛してできたものご思われる。

○コツチャ オンデンセ。

こちらへいらつしやいませ。

の「オンデンセ」は、「お出ヤンセ」が「オン出ンセ」となつてゐる。「お出ヤンセ」の前身は「お出ヤリマセ」であろう。そこには明らかに「お……ある」の形式がみごめられ

る。

○サーサー。オヘレンセ。

さあ〜。おはいりなさいませ。

の「オヘレンセ」は、「おデンセ」ミ形を等しくしている。

「オ……ンセ」の「ンセ」まで出てくる類になるミ、九州南部の、「オサイヂャル」に對する「オサイヂャンス」、「オサイヂャス」、「オヂャル」に對する「オヂャンス」、「オヂャス」の場合に等しく、その敬意表現の度あいは、さきのロドリゲスの言う「お……ある」や「れる・られる」の場合をこえて、高い程度のものになることは、當然であらう。

陸中に「オンデリ」「オデツテ(タ)」はいちじるしい。

そのうえに、北の輕米辯なミでは、

○サー。コツチサ オハエリヤツテ クナサリマセ。

さあ、こちらへおはいりになつてくたさいませ。

○オヤスマヤネアデー オデアリマス カ。

お休みにならないでいらつしやいますか？

のようにも言つている。「オハエリヤツテ」なミ、「おはいりあつて」がよくくまれる。

陸奥にはいつでも、野邊地町例に、

○ホントニ オデリー。ほんまにいらつしやい。

があり、十和田村でも、

○ヤスンデ オデー。休んでおいでよ。

○ヤスンデ オデリ。休んでいらつしやい。

なミと言つている。「オデリ」は「オデー」よりも尊敬待遇の念が教い。

「お……ある」形式にして、「オ……ヤル」に「オ……アンス・ヤンス」類をも加えて考えれば、奥羽の東がわにこの形式のおこなわれることは、そうさうにさかんであると言つてよい。

しかし、奥羽その現象の中に、「お……ある」の「ある」が析出せられた「ヤル」單獨の用法、八丈島のさきの「……ヤレ」のような「ヤル」ことばは、おこなわれていない。

そのさい、西がわの「秋田方言」に、「早く起きやれ」なミと言うのは、別に注意される。

このことは、これのよくおこなわれる九州南部なミに比べて、また注目すべきことである。ここには、東北地方の「お……ある」形式を存せしめた條件に、他地方のミはちがったもののあることが想像されよう。地域社會の地理的特質のちがいは、まず一般的條件として考慮される。その所にこのものが用いられる時、その地域社會に應じて、用語・用法の地方的特色が生ずる。關連形式の派生や異形式の分岐は、その地方的特色の用語感情のもとにおこるから、そこに地方色はいつそういちじるしくなる。また、そのような中にあつては、かく〜の表現法は分化することになつたといふこともありうる。土地風はこうして大きくなる。それが、生活語としての自然の發展でもある。

それにしても、「お……ある」形式そのものは、以上のよ
うに、廣く東西に見いだされた。これが、中央語の「お……
ある」形式の分布をすれば、よく全國にわたつて分布したも
のである。もしも、「お出デル」「お行キル」の類の、今日、
四國近畿東海道その他に見いだされ、「お出デタ」はもつと
廣く見いだされるようであるのを、「お……ある」形式の表
現法の産んだ末のもの、あるいはそれに關係のあるものも解
釋することがゆるされるならば、いわゆる「お……ある」形
式の分布は、いつそう明らかに、全國的にさぐられることにな
る。さらにまた、「ござる」をとつて、これが「ござある」
であつたことを問題にすれば、これもまた、「オチャル」に比
照してここにさぐりあけることができる。「お出ある」も「オ
チャル」になつて、一語の動詞風のものになつた。「ござあ
る」が「ござる」になつたのもそれに等しい。その「ゴザル」
ことは、今日も、東北と九州を筆頭に、方々に、「ゴザ
ツタ」（いらした）「ゴザレ」（おいで）「ゴンジャイ」（い
らつじやい）なきに、なお、老人層本位に用いられている。
「來る」や「行く」や「有る」「居る」に關係した特殊語の、
特別の殘存力のつよさである。「ゴザル」に「お……ある」
形式を考えはしないとしても、かりに「ご……ある」ももつ
けられる点のあるのをとりあけるをすれば、これをここに
合わせ見られないことはない。

このようにさぐりあつて觀察すれば、「お……ある」形式

類の待遇表現法は、全國に、そうさうによくおこなわれたも
のを見ることができる。これを單純に中央語の「お……ある」
形式そのものの流布周囲を見ることに難があるをすれば、こ
ういう表現法が、なんらかの影響を、よくもさう四周に及ぼ
したものである。あるいはまた、このような形式の表現法を
みるに、よくも全國に、相應じておこつたものである。
甲乙丙以下の諸地域がある時、さかばは、他に對して、言語
影響上、優位に立ち得たであらう。二地域があれば、すでに
そのことがありうる。さういふ点では、言語影響さういふもの
を一般的に考えざるを得ず、したがつて今の場合でも、「お
……ある」表現法のなんらかの影響の波及、あるいはその表
現法を實現しうる可能性・傾向の波及は、考えられることであ
らう。現状から理解するのには、おそらく、「お……ある」
は、中央語の標準語的なつよい勢力であり得て、その影響
を、よく地方に周布せしめ得たのではない。近江地方にも
「ヤル」を存している。近畿内にもこのような事蹟の
あるのを見るに、それと、南九州や八丈島の「ヤル」をさば
を合わせ考へて、「お……ある」形式の流布のつよかつた
らしいおもむきが觀察される。東北地方も、その東がわ地區
に多くこれが見いだされた。これも、中央語周布のたてまえ
からするに、奥羽西がわは東がわに比べていつそう中央から
の改新波の影響をうけやすかつた地域と解されるふしが多い
から、その結果では、特に東がわが、このような分布を示す

はずだったとも考えられる。

四

國語主体の周圍周布という一般的法則によつて、この國土にこの國語がひろがっていった。その典型的な擴散によつて、國の東北地方と西南地方とが同じ状態を示すまでになつた。今日、「お……ある」形式の分布を見るに、まさに東北と西南との一致がよりあけられる。言語の分布脈動、周布の動きをたぎるに、この兩端の一致が、合理の事態として理解される。方言分派・地方語集團・方言境界は、こうして、周圍、論的な見かたの上に當然にみこめられる。東北と西南とは、國語の注目すべき方言境界であり、それは、「お……ある」形式に即して見れば、前述のように動的に把握されるものである。なお、他の事象について見よう。

さきに、「れる・られる」敬語法の「來ライン」「行かい」が、東北の表がわに分布していることを述べた。それと同じものが、西南、九州南部地區にあり、つゞいては、天草・西彼杵半島方面にも見いだされる。たゞし西南地方のは、「行かいた」「來ライた」「來ラッた」なまの形でおこなわれる。ここの多いもので、命令形の用法は見られない。待遇表現法としての用語氣分は、東北西南相似している。いずれもかなりくだけた敬意の表現となり、よく知つた間からでの敬語法となる。なぜ一方は命令形が主になつておこなわれ、

他方はそれ以外の形が主になつておこなわれるのか。同じものをほど同じ程度の待遇用法にこぎめた点は、まさに周圍的一致である。その上でのこのような分化は、やはり地方性を反映するものと思われる。嚴密に言えば、東北は東北であつて西南ではない。西南についてもまた同じことが言える。

——一般に、活用語の用法を遺存せしめるすれば、さかく命令形を一つ殘存せしめ、またそれに片よつたさゞまりかたをさせるこゝが少くない。かと思つと、命令形を缺いて、他を存せしめるこゝもある。いずれも、ものの衰退過程の現象である。

「れる・られる」敬語法には、東北と西南との遠隔一致の内がわに、近畿の中にはさんで、岡山縣地方の「行かレー」「來レー」なまの、富山縣地方の「行かレー」「來レー」「せらレー」なまの、「レー・ラレー」命令表現法の一致がある。そうして、近畿は、京都市下の中川郷や、紀州の北部地域、近江なまに、「レル・ラレル」のいろ／＼の用法（命令形の用法も）を見せている。

近江については、井之口右一氏の御研究がある模様であり、また、岩本一男氏に「滋賀縣方言の語法に就いて」がある。筆者の踏査は地点がごく限られている。

京都市下と紀州とのこゝについては、かつて、「近畿方言」(10) 〱一九五〇四月に、「京都市下『中川郷』の敬語」という拙論を寄せた。

近畿を中心として東西に見いだされる以上のような分布状態は、やはりこのことばづかいの周圍的擴散を思わせるに十分であろう。古來の中央語「れる・られる」(る・らる) (るる・らるる)は、諸地方によくおこなわれたのちがいない。「せらるる・させらるる」の轉訛した「シャル・サツシャル」がまたよく國の東西ミ裏日本がわみに、今、見られ、表日本がわにもその殘形あるいは退化用法が点々で見られる、その全一状態からすれば、ここに、「せらるる」なきの要素としての「らるる」の廣汎な分布があつたことが知られる。そういう、「らるる」を内攝した「シャル・サツシャル」ことばの分布ミ、問題の「れる・られる」ことばの分布殘存ミを合わせ考えれば、「れる・られる」ことば今日の存在のありさまはけつして偶然でないことがわかるのみならず、「れる・られる」が、もぎく、國土に廣く自然的に流布したらしいことが知られる。今の殘存は、かなり規則的に、東西對應の相を示したものであり、その兩極に、九州西南部區域ミ表奥羽の一定領域ミがみこめられる。

五

西南、九州ミ、東北、奥羽ミの一致が見いだされる場合は、さきの「シャル・サツシャル」ことばの場合のように、裏日本がわも、九州・奥羽によく連なつて、同似現象を示すことが少くない。中舌母韻 (i) (ii) が東北地方にいちじるし

くて、一方、九州南部地方にも、薩摩半島から南島にかけてこれが見られるかと思つと、山陰・北陸にもこれが分布している。天草の「ふじんバ敷ク。」のような、も中舌母韻であつたことを想像せしめる訛音の分布も参看すれば、右の東西一連の分布は、東北から九州へ、かなりはつきりしたもののみこめ得る。つぎに、ラ行子音のすべりおちぎみ、ないし脱落の現象なき、九州に、例の「ヨカ」ことばを産むほごいちじるしく、山陰にまたいちじるしく、北陸にもこれがあつて、東北東國がまた、「あるべー」を「アンべー」のように言う。「くれナサイ」の「くれナイ」も奥羽で「くナイン」ミ言つている。つぎに (je) がまた、九州から裏日本がわぞいに (これは山陽道にも) 東北地方に見いだされる。それに合せて考えれば、東北に「在郷」を「ジャイゴ」ミ言ひ、九州で「行きンサツた」を「……シャツた」ミおもに筑前方で言つているのも、やはり合理的な、東西呼應の分布ミ見られる。(F) 子音の分布は、東北内に、裏日本がわに、九州南方南島方面に見いだされる。

○ヤスマンヂ ハヨ イゴ ヤ。

休まないで早く行こうよ。

の「行ゴヤ」の「ゴ」ミか、「ドゲー」イガイダガオ。」(こへ行かれたかね。)の「ゲー」「ガイ」「ダガ」ミかの濁音現象は、これらの例を持つ西南、南隣方面ミ、例の東北地方ミが相應じてその特色を示しており、日本海がわで

は、北陸が、東北の亞流として、「ハタチ」(廿才)を「ハダチ」と言つたりしている。田羽莊内の「清にあらき濁にあらず」(東條操先生「莊内語及譯釋附莊内方言攷・濱狹一序」)の中濁ミという微弱な濁音は、カ行音タ行音に微妙であるが、いわゆる濁音化のいさじるしい地方には、このような随伴現象もおこり得るミ考えられよう。信州北部や北陸にも中濁があるミという。薩摩半島のは、中濁ミというよりも本濁がまず耳につく。その上に、微弱な中濁もありうるのか。この中濁の程度はじつに微妙で、聞き手がちがえば判定がちがうミもあり得よう。薩南に中濁があるミすれば、なお、西南ミ東北一帯ミの、濁音現象の共通近似が注意されるミになる。

陸奥の北山長雄氏が、「津輕方言箱ハガキ」第一輯についてなされた「津輕方言の簡單な解説」によれば、ハ行の四段活用動詞はラ行の四段活用になつてゐる。

買ふ——カ
笑ふ——ワ
ラル

ミある。たま／＼、薩摩大隅の内にも、「エンクワリ」「エンクワル」(宴會)がある。これらは偶然の一致かもしれない。なお求めれば、例の「長崎バツテン」こまばが東北にもある。(橋正一氏「方言學概論」雑誌「言語生活」二月号の「方言をめぐつて」参照)接續助詞の「ミも」も問題になる。東北に「ダドモ」(ラルム)が多く、九州の南部ミ西邊に「ドンカラ」「ドンカイ」「ドンカー」なきがある。「ド

モ」は出雲地方にもいちじるしい。九州の「ゴタル」ミ東北の「ゴツタ」「ゴンドバ」なきも考え合わされる。肥前や天草方面の命令辭、「來てくれロ。」などの「ロ」は東國の「ロ」に等しく、「やらんサー」なきの「サ」がまた東國のミ相似ている。

この「サ」なき、そのおこなわれる實情を觀察するのに、自然發生的に、期せずしてここにもおこり得たものらしい。「ロ」助辭にしても、必ずしも東國傳來ミは限るまい。助辭的な表現は、個人的な、自然本能的な、事物に即應した表出でもあり得ようから、國語に生きる人々の、生活の似たような場では、所をたがえても、偶合する現象をおこし得たことであらう。このことは、助辭的表現にかぎらず、廣く、こまばづかい全般のうえに、想像し得るのではないか。こうして、東北ミ西南ミには、必然のつながりはなくして、結果の上で、一致を見得るようになったことが、だん／＼にあると思ふ。岩淵悦太郎氏は、「言語生活」(二十七年二月号)の「方言をめぐつて」(座談會)の中で、

私の考えているのは、單なる偶然の一致というより、ある條件が整つた時には同じような現象が起るのではないかというこゝです。だから、現在各地にたまたま見えている同じ現象が、ほんの氣まぐれな偶然の結果さか、歴史的に見ての殘存形さかいうこゝでなしに、おたがいに無關係でありながら、條件が一致していたので、同じような現象が離

れた土地に起るさういふことなのです。

と述べていられる。このことを考えないでは、言語分布の一見して不可思議な諸状態は解明できない。たゞえば、伊豫に「ナモン」があつて尾張に「ナモ」がある。その不可思議な孤立散在は、なお探索して信州に「ナム」を見、阿波に「ナオ」を見、豊岐に「ナモ」を見、さらに各地に「ナンシ」―「ナ一シ」―「ナシ」を見て、關係分布を廣くたしかめることも、その統一觀察の上で、「なもし」系の言いかたの生成する自然的條件―「各地」を超えた、このものの生れる國語的な可能性を考えるのでなくしては、よく解明することはできない。このような、國語的な可能性によつて、廣くそちこちに、同一事象が出現し得るのが、言語分布のもつとも自然的基礎的な理かと思ふ。これは、言語分布の地理的歴史的事實に對して、言語的原因によんで區別したいものである。言語學そのものの立場で、分布の理由をたずねるゝすれば、まずこの言語的原因があげられるべきだと思ふ。地理的原因・歴史的原因の上に、さらに言語的原因が考慮されて、分布のふしぎは解明される。東北と西南との、わずかの分布を以て相應するふしぎな一致には、言語的原因によるところの多いものがあるだろう。

言語的原因によつて、きわめて單純に、遠隔地相互が、近しい一致を示すこともあり得れば、明瞭な中央語分布によつて、必然的に、東西があざやかな一致を示すことがあり、そ

れがまた、東は東、西は西の土地から、即ち地理的歴史的事實によつて、されほごかのひずみ・相違をおこしていることもある。そのような事態の重なり合つたところに、東北地域は東北地域なりに、西南地域は西南地域なりに、一定の方言境域を現わしている。平板化して見れば方言區劃であるが、動的に眺めれば、周圍周布の所産としての、層脈的な、時代性を反映した方言境域である。それが今、總体として、相互に比較されるべきものになつてゐるのが、注目をひくのである。

六

日本語の方言状態について、古來のいわゆる東國方言を問題にする時、こゝは單純には解釋されなくなる。東歌によつても知られるあすまこまばの世界は、その昔まのような方言分派であつただろうか。所詮、國語の一方言ではあつただろうが、それは、中央語が近畿に中央語としての勢力を確立してからの方言であつただろうか。それとも、中央語が近畿に成立する過程の中にすでに地位を得ていたような一大方言であつただろうか。今日の、いわゆる音便の方式が否定表現法とかが、國の東半と西半とでこのようにちがう事實とつて見ても、東西には、何か地盤的特質の差異のあり來つたことが考えられる。中央語周布の場合にも、近畿から西へは流通が容易であつたが、國の東半へは、北陸道ぞいの周布の比

較的容易であつたのに比べて、東海道がわへは、容易でなかつたふしがうけとられる。

それにもかかわらず、東北と西南とに一致の現象がみられるるまでに周囲のあざやかなものが見られるのは、まつたく、中央語成立後の、安定した長い國語史の自然の勢によるものであらう。かえりみるに、國語は、その成立事情にもつながつてくるかと思われ、東西方言の深い對立、その相違の

上にそれを渡つて、中央語周囲の波を及ぼしたようである。日本語方言状態を割つて見れば、根柢には、東國方言を成長せしめた東國的なものと關西的なものとの對立がうかがわれ、つぎに、その上の層として、周囲周布の層脈がくみとられる。

(二七・三・一〇)

(廣島文理科大學助教授)